



おおまえ まひろ
大前 實さん
(昭和4年生まれ・86歳)



きじ おりょうこ
雉尾 凌子さん
(香川県立丸亀高等学校1年)

コーディネーターより

坂出市瀬居町は、かつて塩飽諸島、与島諸島に属する瀬居島という島でした。瀬居島で生まれ育った大前實さんは、昭和43年、番の州臨海工業団地の造成に伴い、島が陸続きになるまでの激動の時代を知る生き証人。長年、漁業協同組合参事や坂出市議会議員を務め、瀬戸大橋建設のときも、第一線で交渉にあたってきました。現役引退後も、瀬居町の自治会長として、地元の祭りの保存に尽力されています。中でも瀬居八幡宮の秋祭りで行われる「船渡御」には特別な想いがあるそうです。雉尾さんは瀬居町へ何度も足を運び、9月に行われた船渡御も見学。大前さんの船渡御の話聞きながら、今の瀬居町とは違う瀬居島での生活に想いをはせているようでした。

もある縄を海底に沈めてね。餌は大潮のときに潮が引いた浜へ行ったら、そこらじゅうで捕れた。中には、それを持って船団を組んで日本海の方まで行って漁しよったんや。日本海行ったらね、鯛がよく釣れる。昔は魚を数えるのに匹は使いよらんかった。貫を使う。一貫目、二貫目ゆうてね。それが、埋め立てするようになってからはえ縄も廃れてしまった。海岸を埋め立てたら、干潟がなくなる。干潟がなくなるから「はえ縄漁」の餌になるムシもなくなる。

—— お祭りで子供たちが太鼓を叩いていました、それは昔からなのですか？
本来は若いもんが叩くけどな。大事な日はね、子供が叩くん。丁度私がな、議員やめて10か月になった時に、自治会長してくれと言われて。その時にな、だんだん子供が減ってきて、男の子の太鼓持ちがおらんようになってきたんや。さあどうするかじゃ。「女の子もよせな祭りができんが」と言うて初めてね、女の子も太鼓を叩くようにしたんや。

—— それまではずっと男の子が？
そう全部男の子。大体ね、海の祭り船に女は乗せん。昔から海の神様は女の神様やと信じられとるからな。でもお祭りを続けるには、そんなこと言うておれん。それで各地区と相談して、これからは太鼓持ちの女の子は乗せるぞと。それから始まった。平成7年にな。

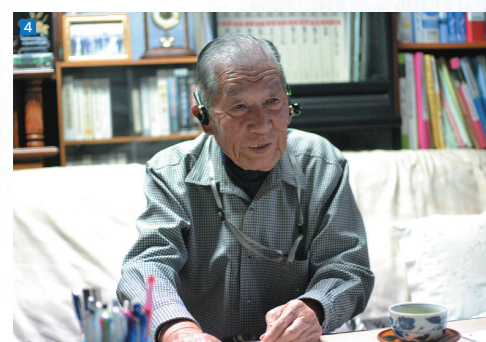
—— それまでは、お祭りには男の子だけが参加できなかったんですね？
うん。だから女の子は祭りをしても、

船渡御がなくなったら、瀬居島が沈んでしまう。

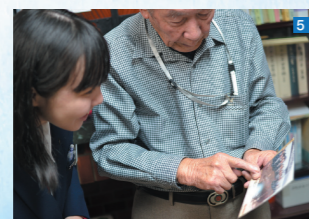
瀬居島の祭りの守り人 大前 實さん(坂出市)



祭りは島だった頃の記憶を受け継ぐもの。



1 瀬居八幡宮の秋祭りで行われる船渡御。かつては「瀬居の華」と呼ばれ、周囲の島の中でも、特に盛大だったそう 2 華やかな大漁旗が瀬居町の漁師たちの気概を伝えている 3 祭りに欠かせない太鼓叩きの子供たち。瀬居町の祭りの伝統を受け継いでいってほしい 4 島から陸へ、瀬居島の変遷を語ってくれた大前さん 5 聞き書きの様子。写真や古い地図を見ながら島が埋め立てられるまでの様子を話してくれた。「この辺には、番の州の他に、なんこの洲、沙弥の洲、前の洲、宮の洲ゆうて5つ洲があった。そこを埋め立てて番の州の工業地帯ができたんや」 6 大前さんのご自宅に飾っていた昭和20年末の瀬居島の写真。まだ島だった頃の貴重な風景



大前さんから受け取った言葉

—— 船渡御で使う昔の漁船は、今とはどんな風に違っていたのですか？
今はみんなプラスチックやけどな。昔のは綺麗なんやで。ヒノキやからな。普通は杉板を使うんやけど、スギは水を吸うてしまう。だからうちは全部ヒノキ。船は酒をつけて磨くんや、そうしたらぴかぴか光る。

—— すごくいですね！

船渡御は、漁船に神輿を乗せて、海を渡りながら海上安全と大漁を祈る神事なんや。だから船渡御には、その年に造った新造船を使うん。神様を乗せるからな。昔は12隻で船渡御しよったんが、今は6隻。だんだん減ってきてよということは、漁民も減ってきてよということやな。

昔からね、この地域は「はえ縄漁」を専門にしてやってたわけ。何百メートルも神輿や道具には触れられなかった。今でもそうや。女の人は祭りに関する仕事はやらない。祭りに参加できるのは女の人でも子供だけや。

—— 女性は何をしていたんですか？
例えば、お神輿さんが集落を回って八幡さんへ戻ってくるやろ。そこまで来たら一服するわけ。その時の炊き出しとかな。おにぎりしたり、みんなに食べものや飲み物を配るわけ。そんな仕事してくれよった。

—— 今と昔では変わったことがたくさんあるんですね。これまでに祭りをやめようという声はなかったんですか？
それはないわ。お祭りはやらなかいん、先祖に怒られる。これが歴史と伝統や。船渡御がなくなったら、瀬居島が沈んでしまう。一年の中で一番大事な行事やからな。

参加者の感想



もともと瀬居町は瀬居島という島でした。埋め立てられ、陸続きに。これは船に乗って行く船渡御にとって大変なこと。お祭りを残そうとする取り組みを聞いて「歴史は形を変えてもいい」ということを学びました。歴史の形を変えるというのは今まで積み上げてきたものを否定するのではなく、それらを生かしながらより良いものに仕上げ残してゆくということ。昔の人も今の人も、伝統を長く伝えていきたいという同じ思いでいることに強く感銘を受けました。

